

## 2024年度 卒業式 式辞

ご卒業おめでとうございます。

皆さんの門出に際して、清泉で学んでこられた言葉「Dominus Tecum」についてお話しいたします。

「Dominus Tecum」は、「主はあなたと共におられる」という意味です。聖書ルカの福音書で、天使ガブリエルがマリアの前に現れ、最初に言った言葉です。では、マリアに話しかけたとき、ガブリエルは、なぜ、この言葉から始めたのでしょうか。マリアも、この言葉を聞いて「いったい、この挨拶は何のことか」と首をかきあげています。

「受胎告知」と呼ばれるこの場面は、イエス誕生とともにクリスマス物語を構成する大切な場面の一つです。クリスマスは、楽しいイベントというイメージが強いでしょう。しかし、これは、当事者であるマリアとヨセフにとっては、思いもかけない「恐怖の出来事」でした。

天使ガブリエルが現れたとき、マリアはヨセフと婚約していました。当時、ユダヤ人の社会では、婚約しているカップルは律法上夫婦であるとみなされていました。つまり、共に暮らしていないだけで、法律的には、マリアにはヨセフという夫がいたわけです。そこにガブリエルが現れ、マリアが受胎することを伝えたのです。つまり、マリアはヨセフの子ではない子を身ごもることになります。ユダヤ教の律法では、夫以外の男性と関係を持った女性に下される罰は、石打ちによる死刑という極刑でした。ガブリエルの言葉を聞いたマリアは震え上がったことでしょう。

マリアの前に現れた天使ガブリエルは、「Dominus Tecum（主はあなたとともにおられます）」と語り始めます。そして、「あなたは身ごもって男の子を生む」ということばを聞いて、恐怖にとらわれているマリアに対して「恐れることはない」と告げます。

ヨセフもまた、マリアの身に降りかかる社会的制裁を予想して立ちすくんだことでしょう。マリアの命を助けるために、マリアとの婚約を破棄して、逃（に）がそうとさえします。しかし、その時、ヨセフにも天使が現れ、こう告げます、「恐れず、妻マリアを迎え入れなさい」、生まれる子は「インマニエルと呼ばれる。この名は『神は我々とともにおられる』という意味である」と。（マタイ1）

そして、マリアとヨセフは、「神があなたとともにおられる」だから、「恐れるな」という約束を信じました。だからこそ、二人は手を携えて、イエスを誕生させ、育てるという、歴史を大きく変える出来事に立ち向かうことができたのではないのでしょうか。

一方、現代に生きる私たちが、「Dominus Tecum」という言葉を聞くと、ひとつの質問が心に浮かびます。それは、「神がともにおられる」としても、神はどのような形で私たちとともにおられるのだろうか、という疑問です。ただ黙って、私たちを見つめているだけなのだろうか？この疑問への答えとなる出来事が福音書に描かれています。

聖書の中には、現代の私たちと同じように、様々な恐怖におびえる人間が登場します。マタイの福音書に、船で湖に漕ぎ出した弟子たちが暴風雨にあう場面が出てきます。恐怖にとらわれている弟子たちは、イエスが水の上を歩いて近づいてくるのをみて、さらにおびえます。そんな弟子たちにイエスは言います。「安心しなさい。私だ。恐れるな」と。また、ペテロは、船から足を踏み出しておぼれそうになり、イエスに「助けてください」と叫びます。イエスは、そんなペテロの腕をとり、水から引き上げるのです。そして、イエスが船に乗り込むと嵐が止んだと伝えられています。

この場面は、イエスが実際に水の上を歩いたのか、という点に私たちの関心は集まりがちです。しかし、重要なポイントは、おびえている弟子たちのもとに「イエスが、すみやかに、助けにやってきた」。おぼれる「恐怖にのみこまれたペテロを水から引き上げた」、というイエスの助けの具体的な「動き」なのです。

つまり、「Dominus Tecum」とは、神が、私たちのそばにいて、絶えず、具体的助けの手を差し伸べていること、そして、その助けの手につながった時、私たちは恐れから解放される、ということを表しているように思われます。

今日の世界は様々な恐怖に満ち溢れています。国家間の紛争によって、これまで暮らしてきた母国と生命までも失う恐怖。政治的に、社会的に、そして、個人間で、強者と弱者がへだてられ、弱者がさらに痛めつけられる環境に生活する恐怖。

恐れは誤解を生みます。猜疑心を膨らませます。そして、私たちを孤立させます。

その結果、恐れにとらわれた私たち自身が、逆に、困難を抱えた他者を迫害するようになることさえあります。SNS の広がりとともに、あなた方も日常的に見聞きしている様々なバッシングの嵐は、その典型的な表れと言ってもよいでしょう。このような「恐れ」は、私たちの本来的な成長をとめ、他者とのつながりを破壊し、未来へ向けて踏み出そうとする私たちの足をすくませます。

しかし、そんなとき、神が私たちとともにおられ、ともにいる神が、「恐れるな」と語りかけるだけではなく、様々な具体的な方法で私たちに助けの手を差し伸べてくれると信じることができたらどうでしょうか。それを信じることができれば、私たちの心は恐怖から解放され、再び、力強く歩み出すことができると聖書は教えています。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。」（イザヤ 41:10）これはイザヤ書の一節です。聖書の中には、「神が共にいる」という言葉と「恐れるな」という言葉がセットになって、繰り返し、繰り返し語られています。

それは、いいかえれば、「Dominus Tecum—神が共にいる」のは、私たちが、様々な恐れによる、とらわれの鎖から解放されて、着実に前に進むことを可能にする、神の「いつくしみ」のあらわれではないでしょうか。

マリアとヨセフ、そして弟子たちが、それぞれの困難と恐れの中にあって、「神が共におられる」「恐れるな」の約束を頼りに歩み続け、歴史を刻むことができたように、これからの日々、皆さんが、喜びの日も、悲しみの日も、そして何より、恐れの間閉じ込められて、息ができなくなるような時に、神が絶えずあなたとともにあって、様々な人々や出来事を通して、助けの手を差し伸べてくれるという約束を信じることで、新たな息吹を注がれて歩みだすことができるようにと心から願っています。

後ほど、私たちは、「神ともにいまして」という聖歌をうたいます。

この歌を作詞したのは、19 世紀末に活躍した、ジェルマイヤ・ランキンというアメリカ人牧師です。ランキンは、英語の「Good Bye」が「God be with you（神があなたと共にいてくださいますように）」という別れのあいさつが短くなってできた言葉であることを念頭に、この歌をつくったと言われています。

日本語の歌詞は、「神ともにいまして／行く道を守り、天（あめ）の御糧（みかて）もて、絶えず育みませ」と続きますが、英語の原曲のタイトルは「God be with you, till we meet again」です。「また会うその日まで、ずっと、神があなたと共にいてくださいますように」という意味で、このフレーズが何回も繰り返して歌われます。

私も、皆さんの門出に際して、このフレーズを繰り返して祈りつつ、お送りしたいと思います。卒業おめでとう。God be with You. 神が皆さんと、いつも、いつも、共にいてくださいますように。

2025 年 3 月 清泉女学院大学 清泉女学院短期大学 学長 田村 俊輔